Roman

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

刺のある樹

仁木悦子

Roman Books

著者の了
解により
検印廃止

昭和38年6月15日　第1刷発行

刺(とげ)のある樹(き)

著者　仁木悦子(にき えつこ)
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京3930
電話大塚(941)大代表3111

¥ 200

© 仁木悦子 一九六三

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)　(黒柳製本)

1 第三号温室……三
2 形なき恐怖……一七
3 凶報……三五
4 二人の令嬢……三一
5 ミシンの音……三八
6 姉と妹……四四
7 お菓子の王様……四四
8 嘆きの家……五九
9 梨森という男……六四
10 若い医師……七〇

11 現場検証……八一
12 追跡……八六
13 耳にした話……九四
14 邦彦の話……九六
15 よごれた手袋……一〇三
16 銀のシガレット・ケース……一〇八
17 自動車紛失事件……一一三
18 立ち聞きにあらず……一二〇
19 泥とハンマー……一二七
20 過去の男……一三七

21 数字のむれ……一四
22 ゴミ箱検査……一四九
23 電気コタツ……一五七
24 脱出……一六二
25 カッパの由来……一六八
26 新たな事件……一七三
27 解明……一七七
28 奇妙な電気学……一八六
29 はだかの遺書……一九二
30 むすび……一九九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

刺のある樹

1　第三号温室

「シャボテンに、そんなに水やって、大丈夫なの？　にいさん。」

長身の兄を見あげるようにして、私はきいた。シャボテンというやつは、元来が砂漠の植物である。植物を育てるコツは、本来その植物が生えていた場所の条件に、できるだけよく似た環境をつくってやることだ、というのが、私の兄、仁木雄太郎の口ぐせである。その筆法で行けば、シャボテンに必要なのは、乾ききった多量の砂と、その砂を炒りつける強烈な太陽とであって、水なんかかけてやるのは御法度ではないのかと、私は心配でならない。

「ねえ。シャボテンは乾燥を好むんでしょう？　水なんかやったら腐っちまわない？」

兄貴のむぎわら帽子が、ゆっくりと回って、大きな茶色の目が、こっちを見て笑う。寒だというのに、アンダーシャツ一枚の夏姿である。この第三号温室の中は、年間を通じて気温摂氏二十八度前後に保たれているから、シャツ一枚でも汗がにじむほどだ。背丈の倍もあろうと思われる柱シャボテンの下に、麦わら帽子をあみだにかぶって立っている兄のかっこうは、まさにブラジルの農民だ。もっとも兄に言わせると、このつばびろの麦わら帽子も、単に気分を出すための小道具というわけではなくて、そこら中わがもの顔にのさばり返っている奇怪な熱帯の植物の鉄針のように堅い刺から、頭や顔を保護するための必需品なのだそうだ。

兄は、温室のすみに設備された水道の栓をしめながら、

「心配するなよ。サボテンだって生きてるんだ。ある程度の水分は欲しいさ。」

「そうなの？　じゃ、わたしも手伝ったげるわ。」
私は、かたわらに置いてある目の細かなジョロを取りあげるなり、一番手近な鉢に近寄った。
「だめだ、だめだよ、悦子。」
兄があわてて言った。
「そいつは接木したばかりなんだ。へたに水かけたら、それこそ腐っちまうよ。」
珍しい貴重な品種が根腐れを起こして、下の方からだんだんに枯れて来たりすると、兄はそれの頭の方だけちょん切って、別のつまらない種類の頭に持ってってくっつける。つまらない方のの頭も切り落として切り口をぴったり合わせて載せ、ひもでくくっておくのだ。そのほか、成長を促したいときや、数をふやしたいときにも、よくこの接木を応用するらしいが、接ぐ方と接がれる方との太さがきちんと合うなどということは滅多にないから、シャボテンの接木は、時によって実に奇妙な恰好を呈する。細めの柱シャボテンのてっぺんに、ころりと丸い玉シャボテンがのっかって、床屋の看板さながらのもあれば、反対に太い柱の上に、こぶができたようにちょこんと、小さな芽がくっついていることもある。今私が水をかけてやろうとしたのは前者で、接いで間がないとみえて、柱の上にうずくまったハリネズミみたいなやつに、ぐるぐるひもをかけて縛ってある。
「接木したばかりのときは、水やっちゃいけないの？　わたし、ブジサイの挿木なんかするときは、ちゃぶちゃぶに水かけるわよ。」
「アジサイの挿木とはわけが違うよ。これだから素人は困る。」
兄は、問題の株のところに歩み寄って、水しぶきがかかっていないか念入りに調べた。それから、やおら向きなおって、接木したてのとき水がかかると、接着面がどうとかして、だめになってしまうとか、何とかいうシャボテンは週に一回水をやらなければいけないが、何とかは一年やらなくても平気なのだとか、わが国に持って来られて長い年月のたった品種は、湿度の

高い日本の季候風土に慣れて、それだけ水分を要求するようになる、とか、そういったシャボテンの性質をよく知って、それぞれに適した世話をしなければいけない、とか言ったことを長々と講義した。
「めんどくさいの。わたし、頼まれたって手伝わないから。」
私はジョロを放りだし、私たちをとりかこんでいる大小さまざまのシャボテンどもを、いまいましくにらみまわした。ガラス張りの天井を通して真青な冬空が見える。遠くに小さな赤いタコが一つ、漂うように行きつ戻りつしている。世間はまだ正月気分が抜けきらないというのに、こんなおかしな刺だらけの植物のごきげんとりにかかりきっている兄貴の気が知れない、と思った。
「誰か来たんじゃないか？」
兄が聞き耳をたてた。遠くでブザーが鳴っている。
私は脱いであったカーディガンをひっさらって駈けだした。

来客は、見知らぬ人だった。三十六、七と見える中肉中背の紳士で、輸入品らしい霜ふり地の、ダブルの背広を着ている。顔立ちは、おだやかだが無気力な感じのする、これといって特徴のないのっぺりした型で、ただその表情に現われた、ひとかたでない心痛の色が、こちらの心をはっとさせた。服装も態度もきちっとして寸分の乱れもないのだが、顔は疲れきったように青ざめ、ふちの太い近眼鏡のかげには、どす黒いくまができている。
「こちらに、仁木雄太郎さんと言われる方がいらっしゃるでしょうか？」
と言ったその声も、内心の不安を抑えていることが読みとれた。
「おります。兄ですわ。」
「ああ、ではお妹さんで？　悦子さんとおっしゃるのですね。」
紳士は、紙入れから名刺をとりだすと、私に渡した。

「警察の方にうかがって参りました。仁木さんならば、相談にのってくださるだろうということでしたので。」
「と言いますと――何か事件でも？」
私の胸がわくわくした。事件と聞いては、じっとしていられない。どんな事件だろう？　殺人事件だったら、すてきなんだけど。
「いや、別に事件が起こったというわけではないのですが。」
と紳士が言ったので、私はいささかがっかりした。が、あとに続いた言葉は、私をとびあがらせるに十分だった。
「実は、私は……殺されるかもしれないのです。私も、家内も。」
「殺される？　そんな。……まあ、ともかく、兄の所にまいりましょう。兄なら、何とかしてくれますわ。きっと。」
私は、紳士をシャボテン室にひっぱって行った。
「ほう？　これは！」
温室に一歩踏みこむなり、シャボテンのジャングルを眺め渡して感嘆の叫びをあげた。大きなウチワ・シャボテンのかげで、兄が、こっちをふりむいた。
「見事な！　お兄さんが栽培していられるのですか？」
「いいえ、ただお預かりしてるだけですの。この邸の持主の水原さん――ごぞんじですかしら。日本で一、二と言われる貴金属商の水原啓太さんですけど、この方が大変なシャボテン・マニアで、ここにあるのは全部水原さんのコレクションですの。テラスを改造なさって、この温湿度調節装置のついた大温室をお作りになったのだそうですわ。水原さんが奥さんとヨーロッパにいらっしゃるので、おるすの間、兄がシャボテンをお引き受けしましたの。植物学を専攻してるものですから――。おかげで、こんな広いおうちに兄とふたりきりで、すこし広すぎるくらいですわ。」
「しかし大変でしょうな。これだけのサボテンの世話は。」

「でも結構おもしろそうにやっていますわ。あそこにある小さな鉢のは、何とかロビヴィアとか言って、八万円するんですって。あんなものがね。」
「八万円じゃない。十八万円だ。」
兄が近づいて来ながら言った。それから、紳士に向かっていねいに頭をさげたが、そのとき、ちらと私の方を横目でにらんだのは、お客さんを応接間に待たしておかないで、こんな所までひっぱって来た非常識を批難したに違いない。
「だって、……殺されるん……殺されるかもしれないんですって。」
私は弁解した。兄もさすがに驚いたらしい。
「え？」
と、聞きとがめたように、相手の顔を見た。シャボテンに気をとられていた紳士の顔に、また最前の暗いかげが帰って来た。
「そうなのです。」
紳士が名刺入れをさぐり始めたので、私は手ににぎっていた名刺を兄に渡した。種島製菓株式会社取締役尾永益治とある。へえ、この人お菓子屋さんか。どうりで甘いような感じだわ、と私は紳士のもの柔かな横顔を眺めて思った。種島製菓といえば、最近ピンクの箱のココアキャラメルや、ペパーミントガムで、めきめき売り出している会社だ。
「詳しくお話しないと、わかっていただけないと思いますが、このところ――去年の秋あたりからこっち、私の身辺に妙なことが起こるのです。いや、私ばかりでなく家内もなのですが――。そこで、はなはだ奇怪な話ですけれど、私たち夫婦は生命をねらわれていると、考えないわけには行かなくなったのです。ところが、この話を聞いた人は皆、私たちの神経のせいだ、ノイローゼだと、とりあってくれないのです。警察に訴えても同じことです。そこで、家内と相談の上、仁木さんに御相談してみたらということになって、うかがった次第なのですが。」
尾永氏は、ハンカチをとり出して、ひたいの汗をぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb